

低暖地に有望な草種について

井上尚武・中村 進・*岸 洋 (大分県農業技術センター・*畜産開発事務所)

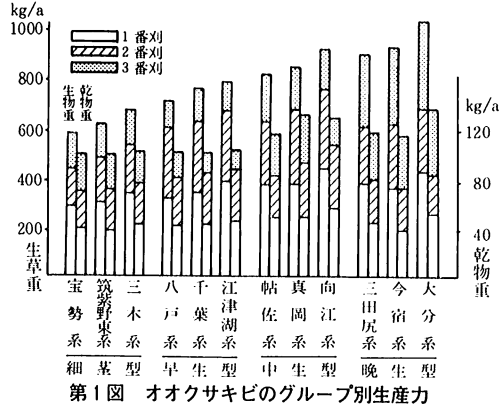
Naotake INOUE, Susumu NAKAMURA and Hiroshi KISI : Some Grasses which are suited to be cultured in the Warmer Region

近年、肉用牛振興対策として現地の自然条件を生かした低コストの草地開発が望まれている。そこで不良環境にも適応する在来または帰化野草の中から粗放的な栽培でも安定的に粗飼料生産が可能な草種による草地の造成維持管理技術の開発が急がれている。

そこで、粗飼料として利用価値があると期待される禾本科9草種、豆科4草種を収集し、季節生産性、再生力、不良環境耐性、栄養特性などを解明し、選抜の基礎資料とすることから「野草の牧草化研究」が始まり、当センターでは耕地向き3草種について調査したので、その成果を報告する。

1. オオクサキビ

全国各地の自生種を収集して生理生態的特性と生産力について調査した。晩生群が最も多収で中でも大分系が高く、7月上旬～9月下旬まで3回刈りで約140kg/aの乾物収量があり、細茎、早生群との間に有意差がみられた。細茎群は茎の細さ、莖数の多さ、熟期の早さの点から乾草向きと思われ、また、中生群は生育期間、乾物収量から短期多収型、晩生群は長期多収型と考えられ、利用目的により栽培系統を選抜することが望ましい。



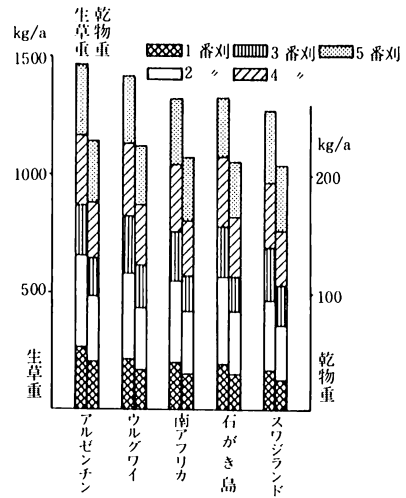
第1図 オオクサキビのグループ別生産力

2. タチスズメノヒエ

南九州で越冬可能な暖地型永年草で、再生力が強いので飼料草としての有望性を検討した。出穂期に早晩生があり、早生群は稈長、葉長、葉幅、穂長が小さく、晩生型は逆の傾向にあり、中生型は中間の値を示したが、1株生重では系統間に差がなかった。各試験地で有望であった5系統を検討した結果、各系統とも5月下旬～10月上旬までの5回刈りで乾物収量200kg/a以上の高い生産力を示した。

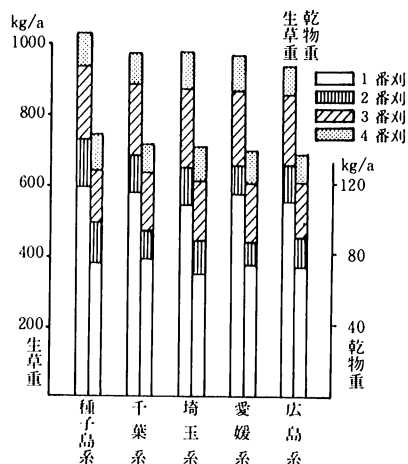
3. イヌムギ

全国から収集したうち30系統を供試した。出穂期は4月下旬から5月初めに集中しており、早晩生の差は判然



第2図 有望系統の生産力

としなかった。越夏性のよい上位5系統について生産力を検討したが、4月下旬～7月中旬まで出穂期ごとに4回刈りし、約140kg/aの乾物収量があった。越夏後9月と11月に刈取り可能なので年間200kg以上の乾物収量が期待できる。



第3図 有望系統の生産力

以上3草種を紹介したが、オオクサキビは当面水田転換畑に栽培して、肉用牛の青刈飼料として利用し、タチスズメノヒエおよびイヌムギは暑さに強いことから低標高の草地造成に適すると考えられる。